

柏木義円 『上毛教界月報』 論文註解稿（六）

市川浩史

柏木義円『上毛教界月報』論文註解稿（六）

市川浩史

◎本文、並びに註、解（承前）

○第二六号（明治三十三年十月十五日）^①

発行人兼印刷人 大久保真次郎

○勢力を教会扶植に集注す可し

社会の地盤たる家庭改善の問題も、教育の心髄たる倫理道德の問題も、社会改良の問題も、政界掃清の問題も果ては外交の問題迄も宗教問題にして解決せられざる限りは徒らに皮相にして一関排し、去て又一関到底根本的に解決し去ることを得ざるなり。我国今日の最要問題は剛健正大なる宗教を確立して社会の良心を明にするに在り。苟くも基督教徒たるものは此に一大決心を為して国家の爲め、同胞の爲め、神の爲め教会の勢力を扶植することに力を出さずんばあらざるなり。

○我儕は死後に何を遺す可きか

英国の一貴女は愛するものゝの死を歌ふて家に一人を減じて天に一人を増せりと云へしとなん。実にや昨迄朝な夕なに見慣れたる慕はしき貌懐つかしき音、今や○^②として聞く可らず。哀しいかな、家に一人を減じたり。然れども清められ完ふせられ栄光輝く天に一人の増せるを見たり。是れ愛するものを喪ふたる者に如何ばかりの慰めぞ。上りて栄光の天に入る聖徒の喜樂何物か之に過ぎん。然れども現世に於て神の国の勢力一人を減じたり。此世を聖化して神の王国と為さんと熱望

する聖徒は此際果して何を為す可きか。一は其品性より出る感化力を遺すことなり。彼のアウグスチン^③が容姿端麗慈愛に溢る、亡母が神前に祈り居るを懐ふて常に感奮せしが如き即ち是なり。一は教会の基礎を永く鞏固ならしめんが為に多少の財貨を遺して教会の基本金に寄附し以て生涯の感謝と為すこと是なり。札幌独立教会の如き、死者あれば必ず感謝の記念を基本金に留むるの美風ありて既に多くの基本金備り居れりと。我上毛に於ても近頃基本金積立ての企てある教会もありと聞けり。教会は永遠を期するの事業たれば斯る遠慮ある企てあらまほしきことなり。吾人は敢て望む志ある兄弟は今より其心掛を為し居り、率先して此美風を作くるの倡首^{はしめ}となられんことを。又教会に於ても或る定額に達する迄は基本金の利子は消費せずして之を積立つると云ふが如き規定を定め基本金増殖の道を預め立て置かれんことを。

註

- (1) 正確には「明治三十三年十二月十五日」。
- (2) もとの字は不明だが、「やう」のルビがある。おそらくは「杓」であろう。
- (3) 教父とされたアウグスチヌスのこと。

解

この論者は第二三号の「教会の基本財産」の趣旨を受け継いだものである。思想的な問題ではなく、きわめて即物的な教会の実際の運営

に関わる問題を巻頭論文として載せた。おそらく、このころ、上毛地区の諸教会にはその維持にかかわる経済的な問題が累積しつつあったことを想像させるに足る。大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』（吉川弘文館、一九七九）第三章において上毛地区の諸教会の形成にかかる経済的な問題が考察されている。

宗教教話

宗教談片（一）

元始に神、天地を創造たまへり。

大なる哉、斯思想、聖書の開巻劈頭先づ堂々たる此森嚴なる大思想に接す。宛ら元始に宇宙生り出でたる様かくやと思はるゝの感なくんば非るなり。保羅曰く、人の知る可き所の神の事情は人に顕明にして既に神、之を人に顕し玉へばなり。夫れ人の見ることを得ざる神の永能と其神性とは造れたる物により創世より以来、悟り得て見る可しと。区々たる論理に神の存在の証を求めんとするは畢竟小智を弄して小理屈に泥むのみ、建築なり、彫刻なり、絵画なり。苟も意匠と想像と智恵とを其中に寓するものは皆は無形の思想の産出する所に非ずや。無形の思想先づ在て、而して後に有形の製作品あるなり。日光神殿の壮麗を見て嘆美するか。誰れか知ん、此模形は夙に目、以て見る可らず。手以て触る可らざる名匠の思想中に存在せしものなるを。絶世の名画とは画工の精神中に在て到底言語の云い現はし難き高尚なる観念を描出し、以て見るもの、精神中に多くの高尚なる観念を喚起するものなりと謂ふに非ずや。宇宙は是れ観念の表出なり、人の精神中に美の観念を喚起して止まざるに非ずや。万有は是れ思想の発現なり。学者の思想を誘起して限りなきに非ずや。此意匠と智慧と観念と思想とにて充滿する宇宙万有を謂て単に目、以て視、手、以て触るるを得る有形のものに過ぎずと為すは実に淺薄なる見解と謂ふ可し。児童が無意義に「つぶて字」^①を書き列らねたるものに向て、誰か研究を凝らすものあらんや。形似の上よ

り見れば均しく是れ文字の陳列に過ぎざるのみ。然るに学者がミルトン、シエーキスピニアの作、カント、ヘーゲルの文に思を凝らすものは其有形の文字の裏に無形の思想あるが故に非ずや。詩人、詩想を此に取りて尽きず。学者真理を此に求めて限りなく哲学者統一の観念をすら此に究むるに至ては有形なる宇宙万有の根基は無窮無限なる無形の大思想、大観念ならざるを得ざるなり。実に宇宙は大詩史なり。之を読むこと愈々深ければ愈々其靈活なる思想、顕現せざるを得ず。至竟、有限の天地は無限の思想の発現なり。而して思想は是れ心靈の発作に非ずや。然則、有形の宇宙は無形の心靈の創造なりと信ずる、豈道理ある信仰に非ずや。

註

① 「つぶて字」とは、続けて書かず一字一字離して書いた文字のこと（『日本国語大辞典』）。

解

周知の、旧約聖書創世記の冒頭、神が世界を創造した由の一節について、やや観念的な論である。ただ、「宇宙は観念の表出なり」とか「有形宇宙は無形の心靈の創造なり」云々などのことばから陽明学的な傾向を見てとることも可能だろう。

故澤山羅保先生（一）
（ママ）

本年我組合教会の総会は今より三年を期して補助教会を悉く独立せしむる可しと決議した。神の堪能に由て此決議通りの実が挙がらんことは我儕の熱望する所である。其れ故に教会自給論の権化とも謂ふ可き故澤山先生を先づ紹介し、次で先生の有名なる自給論を本紙に掲げたいと思ふ。

先生は周防吉敷郡吉敷村の人で世々長州藩の士であつた。生れは嘉永の五年三月だ。子供の時から一風異つた所があつて仙人になりたいと

思て四五日も山に籠られた事があつたさうだ。長州征伐が起つて幕府の軍勢が防長の境に押し寄せた時に先生は当時一六、七才で芸州口を守りて幕兵と戦はれました。戦争が止でから広島、今治の諸藩に遊んで数年ならずして歸へられた頃、丁度奥羽の戦乱が漸く鎮つて旧藩諸隊の解隊と云ふ事で随分藩士に不平があつて一藩穩かならぬ形勢であつた。依て先生は撰ばれて一隊の隊長となり、山口小郡の壘を扼して不意に備へて居れました。事平定の後神戸に出て米人デー、シー、グリーン氏に就て英学を修め、氏の周旋に由て米國に渡航致されました。米國にては先づイリノール州エバンストンなるノールス、ウエスターン大学に入り学業衆に抜んで、同大学を卒業し、更にマサチューセツ州リドルチエストルなるイー、エン、バーカルド氏に就て神学を学ばれました。先生在米中一日宣教師の伝を読て居られた時、一つの思想が黙示の如くに先生の心に現はれました。是れぞ先生に生涯の方針を決定せしめた重大なる思想であつた。其思想とは

日本最大必要は福音の宣伝である。今や黯々漠々日本の社会を掩て居る所の暗黒は基督教の力でなければ決して之を打ち散らすことは出来ない。外国の人ですら宣教師となつて我日本に福音を伝へ其生命を献げんとするのには我日本人であつて争で冷談に我國民の狀態を監過することが出来く可きぞ。

と是れであつた。先生が刻苦勵精得る所あつて帰朝せられたのは明治の九年であつて新島先生の帰朝に二年後れて居る時に、政府は大久保、木戸氏等朝に在て人材登用に急なる、苟も欧米に遊そんだ士は高禄を惜まずして採用する時代であつた。特に先生は山口出身であれば電信はいくらもある。既に先生の親友内海忠勝氏の如くは当時大坂府の知事となつて居つた事である。父母も朋友も先生に仕官を勧め其榮達を望みました。然れども先生の決心は既に前述の如く誠意誠心基督教の聖旨に従ふに在て基督教の爲に受くる困厄は此世の宝よりも宝貴と思へ、百五拾円の月俸を以て徴されたる官途の出仕を斥け、僅か當時男八人、女三人、合計十一人より成れる大坂浪華教会の牧師とな

り、爾曹先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらる可し、との聖諭を確信し、僅々七円の薄給を感謝して受けられました。先生は性至て親孝行であつて基督教の主義に妨なき限りは何処迄も父母の意に適ふやうに勉められたことである。先生は米國で海綿浴に慣れ毎朝之を行はれましたけれども先生の如き弱体には温浴は宜しくないとして大に之を嫌はれました。併し父君は甚だ先生の入浴せざるを不快に思はれ其病氣の節に其許が入浴せぬ故に予も亦服薬せぬとだゝをこねられました。すると先生は直ちに「父上よ、ドウか服薬して玉はれ、私は入浴致しませう」と申されました。個様に孝心深き先生の事なれば其両親が多年先生の帰朝を待ち詫び、帰朝の上は天晴れ青雲の志を遂げて高位高官に其名を輝してよ、と切に望み居り玉ふのに其希望に背て見る影もなき牧師となるは誠に両親の心情を察して堪へ切れぬ思が致したでありませう。併し先生には確信があつた故に此情に克て、暫く父母の失望を其の苦勞を忽び、神の聖職に就かれました。

解

澤山保羅（一八五二〜一八八三）こと、本名馬之進の略伝の一回めである。長州の出身の澤山は新島襄とほぼ同年代であり、日本人で最初の牧師として知られる人物である。以下、続編が続く。

雜録

○畏る可き英國民

二十万の大兵を万里遠征の途に上らしめて而して紳々として余裕あり。南亜征服に關しては何人の干渉をも許さず。若し之を為すものあらば世界を相手として立たんとの意気込を示し、さしも野心満々たる強国をして袖手傍觀一言をも挿さまじめざるは実に近世史の一大偉觀に非ずや。眼識ある世界周遊者は皆曰く、世界中英國民の品性に及ぶものなしと。噫英の世界に雄親する、決して偶然に非ざるなり。世界

中安息日を守ることに、最も厳に宗教的感化を重じて最も国民の陶冶に勉むる英国国民は如何なる国民なるか。謂ふ、左の事実を見て其一斑を知ることを得んか。人は泥棒、明日は雨との諺ある国民は英国国民に対しては耻づ可きの国民なり。英国社会は人は誠実なるものにして決して相欺くものに非ずとの大主義より割り出して一切の法度習慣を定め居るなり。実印もなく、証人もなく、印紙もなく、抵当もなく、手附もなく、前金なくも注文の品物は夫大抵送り来なり。若し欺騙を為さんと欲せば英国の社会の如き最も欺騙を為し易き社会なり。然れども社会の制裁、頗る嚴重にして之に反くものは社会は決して幽らすことを許さざるなり。英国にて殴打と云ふ意味は指一本でも他に着けるは是れ殴打なり。以て英国国民が如何に他人の権利と体面とを重ずるかを見る可く、小兒と雖ども一人も公園の花弁を折るものなしと。以て其公共心に富めるを見る可し。労働者が喧嘩するにも相手が倒るれば其れに付け込んで打着すると云ふ様な卑劣なく、其起き上る迄手を休めて待ち、味方三人にして相手が一人ならば他の二人は手を下さずして見て居ると云が如き、実に堂々たる気象に非ずや。若し途中にて誤て相触る、時、先づ謝辞を述る方を紳士の行為と為して其何れが先に触れしか問はずと云ふが如き何等其気象の男らしきことぞ。其気宇の広潤にして世界を家とするの気象あるは倫敦の兒童が日本人たる徳富氏に途中にて路を尋ねしと云ふ一事にても想像せらるゝに非ずや。而して其国家的抱負の大なるは自由正義、人類的情誼、代議政を以て其国の産出する所と為し、之を擁護するを以て世界人類の為に其国民の負ふ可き天職と為すが如き、実に畏る可く亦学ぶ可きの国民なり。真個我國家を思ふものは深く国民陶冶の根本的問題に意を致さざるを得ざるなり（英国国民の気象に関するものは穂積法学博士及び徳富氏の談話に拠る）

解

文中の「穂積法学博士」とは東京帝国大学法科大学教授の穂積陳

重、「徳富氏」とは徳富蘇峰こと猪一郎のことと思われる。穂積の妻は渋沢栄一の長女歌子。この文章の背景となつてゐる大状況としては、この翌年の一九〇二（明治三五）年に英国とのあいだに軍事同盟が結ばれるという国際関係があつたとみてよいだろう。もとより本文中には軍事的な要素はないが、彼の国の経済的繁栄や高い人権意識、一般の人々の崇高なエチケットなどを素直に称賛し、憧憬の念を隠そうともしてゐない柏木の思いを知ることができる。

○対加藤博士論戦

加藤博士が世界教の急処を衝くと称して文壇に打て出でらるゝ、や¹づ之に一失を²酬³めしものは仏教雑誌たる明教新誌の梅原重山氏なりしとぞ。博士の云ふ所に拠れば反駁又反駁、遂に博士に窮追せられて國家が暴戻無道なる場合には飽く迄極諫す可きも到底聞かれざる時には臣民の義務亦教徒の義務として泣て之に従はざる可らずと答へらるゝに至り、博士は斯く為さば臣民の道は立つ可きも教徒として済まざるに非ずや。氏が云はるゝが如きことは経文の何の処に許しあるやと究問せられしも、遂に要領を得ざりし故、梅原氏の答弁は単に梅原氏の一家言と見做し、仏教は矢張國家と相容すれと断言す可しと曰はれ、併し梅原氏の言は論理は更に立たざるも、國家の臣民としては殊勝なりと嘉称せられたり。次に基督教雑誌なる天地人に現はれたる答論は梅原氏のに比して更に拙に、同じく要領を得ざるものなりと曰はれしが同雑誌は又加藤博士の反駁を駁すと題して論じたりと雖ども吾人は未だ之を讀ざりき。我社の柏木が前々号に掲げし論文は亦之を東京毎週新誌の紙上にも載せたるが、博士は預め其れに対する答文を太陽紙上に掲ぐるとの通告ありしを以て如何なる議論の出るにやと鶴首して待ち居たり。然るに十二月一日の太陽に現はれたるものを見るに、思ひきや柏木と云ふ人は恐ろしい人物だと云ふて吾人をして又しても島国的小量の暗示かと肩を擡めしめ、結局柏木を詔て不忠不義不臣の極と罵られた丈にて何等傾聴す可き議論のなかりしは吾人が聊か案外

に思て又深く学者としての博士の名譽の為に惜しむ所なり。其中、学者の言辞として黙過す可らざるものありしを以て直ちに加藤博士の駁論を駁すと題せる一文を草して之を毎週新誌に投じ置けり。吾人は既に前々号の論文を以て加藤博士を試み得たり。今や之に對せる反響に由て日本の思想界、日本社会の進度を試験せばやと待ちつゝあるなり。吾人は信ず、我日本国家は大国の氣象ある国家なり。決して博士の如く容易く不臣呼はりを為すが如く狹量ならずと。要するに博士の論駁は本紙前々号の議論に對しては単に罵りしのみにして一実弾おも放たれざれば、本紙は之れに對して別に論議は為さざる可し。其後又博士は太陽紙上に於て倫理学の急処をも衝かれたり。之に對しては同じく太陽紙上に大町桂月氏の駁論^⑦出で、先づ老眼の御手筋の狂いにや仏教、耶穌教若しくは倫理学何れの急処をも外れたりと擲擻して割切なる論駁をせられ、博士の太刀筋頗る乱れたるが如くに見受けたり。此論題に關しては多少の波瀾起り来る可れば、必要あらば本紙に於ても更に論ずる所ある可し。要之するに博士は当代の老学者にて其半生は維新以前の旧社会に在り。随て其脳髓も其思想も維新以前の思想にて堅められ、唯之を装ふに泰西學術の衣装を以てせし迄なり。是を以て十九世の思想たる人權、自由、平和、平等、博愛等の真味は到底解し得られず。国家の地盤たる家庭の基礎たる一夫一婦の神聖なる意義さへ理會せられず。或は売淫は何故に不道德なるやとの奇問を提出し、或は世界に正義公正なし、国家の意志はれ論理と唱る竹内楠^⑧、木村鷹太郎氏^⑨一派の保守連と共に存娼論を張らるゝが如き、亦止むことを得ざるなり。吾人は是に於てか特に論理道德の問題にして博大にして深遂、中正にして穩健なる思想を把持せられし少壮有望の学士大西博士^⑩を喪ふたるを深く惜しまずんばあらざるなり。（十二月七日稿）

註

(1) 加藤が、井上哲次郎などと並んで半ば感情的なキリスト教批判を繰り広げていたことは周知のことである。「太陽」四卷九号

(二八九八年九月) 所載、加藤弘之「仏基兩教の急処を衝く」などにその姿勢はよく表れている。

(2) 「梅原重山」は「梅原薫山」の誤り。喜太郎こと薫山は、『通俗仏教』なる仏教雑誌の発刊に關わつたらしい保守的な仏教学者。ただ、仏教系の隔日刊行の『明教新誌』には「梅原薫山居士」と表記されていたので、僧侶ではなかつたようである。著書には『釈迦牟尼伝』（森江書店、一八九四）、『耶穌大敗北…仏耶舌戦』（其中堂、一八九二）、『忠孝と仏耶』（通俗仏教館、一八九九）、『日露戦争とニコライ教会』（鴻盟社、一九〇四）などがある。

梅原の論は、『明教新誌』第四五一九号（二八九九年九月四日）「最後の一刀に酬ゆ（仏基兩教の急処に就て）（上）、四五二〇（同九月六日）」「最後の一刀に酬ゆ（仏基兩教の急処に就て）（中）」、四五二二号（同九月十日）「最後の一刀に酬ゆ（仏基兩教の急処に就て）（下）」であり、それらに對する加藤の反論（加藤の自筆の原稿ではなく、取材による記事と思われるもの）が同第四五二四号（同九月一日）に掲載され、さらにその梅原の反論が第四五二五号（同九月一日）「不義の戦争に對する国民教徒の諫言（加藤博士の辯難に答ふ）」として掲載された。またさらにその加藤による再度の辯駁書（さきの場合と同様、取材による記事と思われるもの）が四五二七号（同九月二十日）に載せられた。そしておそらく最終的な梅原の反論が、その後四五二九号（同九月二四日）に「加藤博士の再度の辯難に答ふ」、四五三二号（同九月二八日）に「加藤博士の再度の辯難に答ふ（二）」、四五三三二号（同九月三〇日）に「加藤博士の再度の辯難に答ふ（三）」、そして四五三三三号（同十月二日）に「加藤博士の再度の辯難に答ふ（四）」として執筆、掲載されている。

(3) おそらく、天水逸民「現存の宗教は皆不完全乎」（『天地人』第一七号、一八九九年五月）をさすものか。

(4) 「東京毎週新誌」八九三、八九四、八九五号所載の柏木の「加

藤文学博士に答ふ、所謂国家主義の妄謬を排す」、「同上（承前）」、「同上（元）」の三論文。

(5) 「東京毎週新誌」九〇三号所載の柏木の「加藤文学博士の駁論を駁す」なる論文。

(6) 「太陽」五卷一号（一八九九年一月）所載、加藤弘之「維新前後通して六十四年間」

(7) 「太陽」五卷四号（一八九九年四月）所載、大町桂月「文明の北漸」

(8) 竹内楠三（？）は心理学者。

(9) 木村鷹太郎（一八七〇〜一九三二）は極端な国粹主義の「日本主義」で知られた歴史学者。竹内と並んで、「保守連」たる所以である。

(10) 大西博士は大西祝（はじめ）のこと。

解

タイトルに「加藤博士論戦」とあるように、柏木にしては相当の感情的なもの謂いである。これまで柏木と加藤とは、以前から雑誌「太陽」誌上などでしばしば論を戦わせた論敵どうしである。否、論敵というだけでなく、柏木にとつて加藤は、学术界の頂点にいながら極端な国粹主義の立場からキリスト教批判や教育、倫理などの分野に対して論を展開している、典型的な体制側の学者であった。柏木としては加藤がかかる議論を展開するならば理路整然とキリスト教信仰の立場から加藤批判をしたかったことであろうが、加藤が柏木に対して「不忠不義不臣の極」といったことばで罵るに至っては、さしもの柏木も、感情的物言いとなったことだろう。「老学者」で「平生は維新以前の旧社会に在」って「随て其脳髓も其思想も維新以前の思想」で固まって、「泰西学术界の衣装」を着けているだけだ、と。ことばの激烈さは措いても、そこで言われていることはそのまま的を得ている。しかし、先方は前においても姿を現わしていない大学者

であつて言論を以て闘いを挑んだとしても先方はとても相手にはしないことを田舎の一牧師はよく承知していた。その隔靴搔痒というか、悔しい思いがこの短文からは十分に見てとれる。

○第二七号（明治三十四年一月十四日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

○第二十世紀を迎ふ

天に栄光 地に平和 人に恩沢あれ^{〔1〕}

これは是れ栄光の天使が基督の降誕を祝したる頌言に非ずや。而して基督降世の目的亦此に外ならざるなり。

天に栄光 願はくは爾名を尊崇させ玉へ。是れ聖徒第一の祈願なり。人生最高の義務は神の栄光を顕はすに在り。「彼は神の体にて居りしかども自ら其神と匹く在る所の事を棄て難きこと、思はず、反て己を虚うし僕の貌を取りて人の如くなれり。既に人の如き形状にて現れ己を卑くし死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり」此の如く己を辱めに附して神の栄光を顕はしたるは是れ基督の世に超絶して高き所なり。最も高き人物は神の栄光を顕はさんことを期するの人物なり。最も聖き家庭は神の栄光を顕はすを喜ぶの家庭なり。二十世紀に顕はるゝの国家は亦必ず神の栄光を顕はすの国家ならざるを得ざるなり。個人も家族も国家も神の栄光を度外に為し居りては永遠の運命は到底失敗たるを免れざるなり。

地に平和 平和なるかな々々。一家平和なれ、一国平和なれ、世界平和なれ。カットリング氏^{〔3〕}南北戦争の際、其悲惨の光景を目撃し酸鼻に堪へず、弾丸に斃るゝもの、如き其四分の一のみ。其他は疾病、若くば暴露の為なり。是れ戦争に従事するもの、過多なるに由る。若し一人にして百人の働を為し得る兵器の發明あらんには以て孤児、寡婦を減ずるを得可しと。是れカットリング速射機関砲の發明せられし動機なり。此恐る可き速射砲も平和を愛するカットリング氏の慈愛心より出でたるを見れば、虎を挫くの猛将、豈に畜に他人の血に由りて自家

胸間の勲章の光輝を加へんと欲するもの、みならんや。亦必ず仁愛平和の為に戦ふ「ゴルドン」將軍の如き人少なからざる可し。戦争亦是れ「其剣を鋤に打ちかへ、其槍を鎌に打ちかへ、国と国とは剣を挙げて相攻めず、又重ねて戦争を習はじ」との平和の時代を来さんが為なり。或人の計算に拠れば現下欧州の列国が戦争を始め其軍隊の戦時編成を成すとせば其兵数無慮二千三百万、其戦争一ヶ年継続せば其兵士を養ふ費用は百億^{ポンド}、即ち一兆円なりと。実に驚く可き数字に非ずや。世界の平和を来らすは実に二十世紀の重大なる使命ならざるを得ざるなり。然と雖も平和を攪擾するものは常に干戈のみに非るなり。罪の在る所には平和なし。滔々たる私利と虚栄とに奔競するの徒は是れ心に平和あるの儕輩なるか。酒に溺し、色を漁するの家は是れ平和ある家なるか。権謀術策卑劣を以て相排擠する社会は是れ平和ある社会なるか。若し日本人にして悉く禁酒すると云ふ此一大事丈けにても実行したりとせよ、社会は果して如何に変化する可きか。之に因て幾万の貧窮が医やさる可きか。之に由て幾万の病者が健康となるべきか。之に由て幾万の妻女の涙が拭はる可きか。之に由て幾万の犯罪が予防さる可きか。而して若し此有害無益の費を転じて之を救済の事に用ひたりとせよ、全帝国に一人の貧者の空腹を訴るものなきに至る可きなり。果して人世より罪惡を取り去り、見よ。世界の光景、全く一変せざるを得ず。樂園は即ち現世に在るなり。此の抜本的の運動を為すは是れ基督降臨の目的にして宗教の抱負實に此に在るなり。

人に恩沢あれ。試みよ。麗らかなる小春の日に丘陵に登りて市邑村落を眺め見よ。其炊烟懶げに捲き上るの光景、陶然たる太平の象に非ずや。然れども其中には子を虐待する親あり。親に不孝なる子あり。夫の無情に泣く妻あり。兄弟相争ひ強は弱を押し、怨恨妬忌争闘誹謗に惨憺たる有様なり。人々の間に恩沢あり、好意あらしむる亦是れ基督降世の最大目的なるなり。

以上の三者は是れ神国の三大政綱なり。吾人は世界同志の勢力を糾合し、此の二十世紀に於ては着々此三大政綱の実現を計らざるば非るなり。

註

- (1) 新約聖書「ルカによる福音書」二章一四節。新共同訳では「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」である。
- (2) 新約聖書「フィリピの信徒への手紙」二章六、八節
- (3) Richard Jordan Gatling (一八一八～一九〇三) はアメリカの南北戦争の際に、「ガットリング砲」なる機関銃を發明した。
- (4) Charles George Gordon (一八三三～一八八五) はイギリスの軍人。
- (5) 旧約聖書「イザヤ書」二章四節
- (6) 仁徳天皇の歌として伝えられている「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」を踏まえているか。

解

柏木における「非戦論」の形成過程を考える際、重要な論考であると思われる。文中の「カットリング氏」はアメリカ南北戦争時に速射可能な機関銃を發明した人物、また「ゴルドン將軍」は中国、清代に、キリスト教に傾斜した思想に基づいて洪秀全が起こした大規模な内乱である太平天国の乱（一八五〇～一八六四）の後期に、清国の傭兵としてイギリスのチャールズ・ゴルドンが將軍として従軍したことで、太平天国軍の敗退が進んだ。南北戦争にしても、太平天国の乱の鎮圧にかかる傭兵の動きにしても要するに戦争である。特に、後者は、やや変則的にしてもキリスト教信仰により、地上に「太平天国」を実現するために清王朝に反乱を企てたものであった。戦争としては、清王朝がアヘン戦争の余波で増税を企てたことが戦争の背景となった内乱であるが、清国に加担する傭兵としてアメリカの軍人やイギリス軍人の「ゴルドン」などが従軍した。太平天国軍はキリスト教信仰に基づいた思想により戦争を始めたというのだが、このときの柏木はこれに対して否定的であったことがわかる。清国側の勝利のため

に戦ったゴードンについて「仁愛平和の為に戦ふ」とまで言つて称賛しているのである。これはあくまでも、ゴードンは清国という国家の勝利のために戦う戦争に従軍したのであつたから、この時点での柏木は国家のための戦争は「義」と考えていたということであろう。

宗教論話

宗教断片(二)

万有の中、人を最も大と為し、人の中、心意を最も大と為すと。果して見る可き有限なる天地万有を以て見る可らざる無限無窮の思想の発現とせば、万有中最も精工を極めたる人間に於て最も其無限思想の精なる所を見る可きに非ずや。人間の価値を残りなく心得し近世の大哲学者は云く「宇宙間懼れても懼る可きもの二つあり。曰く星光燦爛の天、曰く方寸の中の良心、是れなり」と。羅馬大帝国の君主として威焰一世を押し、羅馬の市街を一炬に附し、宴を張て之を見物したりと云ふ傍若無人のニローをも戦慄悶死せしめたるものは其方寸中の良心に非ずや。彼の孟子をして自ら反ふして縮からは千万人と雖ども吾れ往かん矣、と曰はしめたるもの、孔子をして天の未だ斯文を喪ばざるや、匡人其れ吾を奈何と曰はしめたるもの、ルーテルをして若し吾を論破せんとならば宜しく聖經に依り真理に依りて論破せよ、否らずんば予は吾説を放棄する能はず、蓋は良心に背て何事をも為す可らざるを信ずればなり。吾茲に立てり。他に為す所を知らず、皇天上帝吾を扶助し玉へと断言せしめたるものは亦是れ方寸中の良心に非ずや。猛暴幾万の無辜を殺し、幾多の大罪惡を犯して曾て憚らざる元凶を挫で気死せしむるものは良心なり。繊弱なる婦女女子をして迫害の中に立て正を踏で懼れざらしむるものは亦此良心なり。良心が人の心裡深奥なる所に其微声を放つや寂然聞へざるが如くなるも而かも明亮、烈にして且つ剛、百万の雷轟も其声を乱ること能はざるなり。嗚呼此崇高にして正大、天地の勢力を挙げ来るも決して圧すること能はざるの聲、果して何の処より来る天地万有が果して其根基を無限の思想の

本体たる宇宙の大霊に有するとせば人が我以外の声と自覚する、此の犯す可らざるの權威を有する良心の声も亦是れ宇宙の根基たる大霊の心に非ずや。チャニング氏曰く、道徳進歩の頂点は宗教なりと。良心の声を辿りて尊厳絶対なる神に達する、是れ即ち宗教なり。学者の学術思想も詩人の美妙の観念も何れも其根基を宇宙の大霊たる無窮無限の思想観念に在とせば、道徳独り其根基を宇宙の大霊たる無限の善に有せざらんや。一方は道徳を唱へて他方は宗教を拒否するものは是れ自ら道徳の根基を毀て其權威を破壊するものなり。自家撞着亦此れより甚しきはなきなり。星光燦爛たる天が無限の思想の発現なるが如く同じくカントをして驚嘆せしめたる方寸中の良心は亦是無限の善の発現なり。去れば良心声朗かに人心澄み渡りたるの瞬時は匹夫匹婦の心も神を拝する聖なる祭壇に非るはなし。故に基督曰く、心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得可ければなりと。万有の真理は以て無限の真を現はす可く、宇宙の美は以て無限の美を現はす可く、人心の明徳は以て無限の善を現はす可きなり。去れば無限の善なる神を識らんと欲せば宜しく心眼を凝らして良心の光輝を見る可く特に良心の発動の極めて顕著なる聖賢君子を見る可きなり。業舜如何、孔子如何、ソクラテース如何、此の諸聖の徳の輝き出るの根基は実に皇天上帝に対する敬虔の念に在るに非ずや。吾人は万有の冠冕たる人間の最も高く最も聖き所を見ることによつて其奥裏に存する無限の善なる神を認めずんば非るなり。

註

- (1) エマーソンまたはチャニングのことばと思うが、未詳。
- (2) ローマ帝国第五代皇帝のネロ(三七七―六八)。
- (3) 「孟子」公孫丑上のことば。
- (4) 「論語」子罕第九のことば。
- (5) ルターが一五一七年一〇月三十一日に提出した「九五箇条の論題」のことば。これによつて宗教改革が始まったとされている。

（6）新約聖書「マタイによる福音書」五章八節。

故澤山保羅先生（二）

浪華教会の創立は明治十年の一月であつた。其教会は皆伝道者と云ふ有様で、男子も女子も各自定めて働け可き場所を有つて居つた。五ヶ所の伝道地を開て盛に伝道されまして求道者の僧侶は尚ほ其徒を導かんと致し、医師は其患者に道を説き、理髪師は新聞や小冊子を其舖に備へ、理髪し乍ら福音を伝へると云ふ勢ひであつた。先生の献金の主義は受くるよりは与るは幸なりと云ふことで在つて感謝の精神の伴ふは与ることの重なる部分だと申して居られました。其れだから教会への出金も決して義務又は体面（耻）と云ふ側よりせず感謝の心よりする様な方針を取て居られました。先生は勿論献金を勧めもせず、又求めも致されません。自ら毎月其所得の十分の二宛を教会に献じ、又病中、人より見舞として贈られたるものは金品に係らず必ず其十分の一を感謝として貧人に恵まれました。去れば教会員も亦皆感謝の心をして十分の一以上を神に献げ會て教会自給の重荷を咄く者として一人もなく教会の集金は著しく増加した。或る人は所得の十分の一として毎月六十錢を献ぐる力しかなかかりしに五年の後には二十円を献げ得るに至り、或る人は五十錢の処、十五円となりました。個様の勢ひであれば当初毎月の寄附金僅々七円に過ぎざりし所、五年の後には一年七百円の集金を見るに至つた。実に著しい進歩である。

年の頃六十歳許りなる元と仏教の凝り固まりであつた医師が洗礼を志願した。先生が其信仰を問へ試みられた所が充分満足なる答弁が出来た。其処で先生が更に縦ひ其事柄が悪しき事でもなくとも神の御榮へともならず、又己れを有益なる人ともあらしめざる事は何事でも之を棄つるの覚悟あるや、と問はれた所が「然り」と答へました。先生は尚ほ切り込んで、去らば喫煙する者は敢て眞の信徒に非ずと申す訳ではないけれども基督の爲に何の榮へにもならざる事なるが、果して之を禁止するの決心あるや、と儼然として問はれました、すると唯「止め

たいと思ふ」と簡短に答へましたが、二、三日の後、禁煙出来ん。故に洗礼は次回迄延期したしと申出ました。依て先生は直ちに訪問致されました所が、彼は聖書を読み、断食を為して祈り居り、先生を見て申しますには「四十年來の習慣、仲々打破ること困難なり。予は基督の爲には生命さへ棄てたく思へ居るに何故に喫煙位の事が止められないか、此れ畢竟予の信仰が強くないからである。故に今神に祈て居りました」と、依て先生も共に祈られましたが遂に数日して全く禁煙が出来ました。

解

澤山保羅傳の二回目である。このなかでテーマとなつてゐるのが、献金、禁煙の問題である。柏木にとつてもこれらは倫理の問題として重要であつた。

雜録

◎加藤外務大臣¹ 慨嘆して曰く「道德上の事に就て私は英国より歸つてから現今日本の有様を見て余程嘆息を致した。近来政治上の運動に於て賄賂を取る声を盛に聞くが、此は実に慨嘆に堪へぬことである。西洋の中でも賄賂を取る国もあらうが、英国では憲法政治は百五十年も前に開けたのだが、ソナ弊風はない。英国の如きは私の見る所では殆ど収賄は地を掃てないと言つて宜しい……今日日本の社会に於ては政治社会も商業社会も工業社会も其他有力なる社会には随分此腐敗したる空氣がある。是れは甚だ油断のならないことで、若し一般に感染したならば大騒動である」と。政友会内閣の外相、此の如くに慨し、而して収賄の張本公盜の巨魁と攻撃せられて内閣大臣の椅子より転落したる星亨氏、反て推されて政友会院内の総務となる。吾人は我國の政界に殆ど道義の制裁なきを慨せざるを得ざるなり。

◎司法権の侵害 是れ星氏辭職の裏面なりと人は云ふ、吾は其然らざるを望む。然れども長森検事正は星亨に就ては起訴とも不起訴とも未

だ決定せずと曰へ、而して甲斐某の星亨告訴に關しては未だ棄却とも何とも通知なかりしと聞けり。然らば該件は尚ほ予審進行中にして星亨は依然告訴せられつゝあるなり。然るに星亨氏は事既に嫌疑の検査す可きものなきこと明白なるを得たりと聖聰に達し奉り、金子司法大臣又、政友会議員総会に於て星氏の不起訴を決定せしを証言す。此の如くにして星氏は兇戲の如き訳の分らぬ理由を以て容易に重大なる責任を辞せり。此間人が司法権の独立を疑ひ、法律は蜘蛛の網の如し。小蠅を縛し得可きも大蜂は踏み破て過ぎん。伊藤内閣は遂に大蜂星を逸し去らしめたりと曰ふものもあるも果して疑ふ者非なるや否や。聞く、普魯西國ポツダム王宮の園内には古怪なる水車立ち居りて人目を惹くと。是れ今を去る百五十年の昔フレデリック大王が離宮をポツダムに營造し玉ふ時、偶ま其用地に當る所に水車ありければ、宮中の官吏、之を逐はんとせしに水車営業者は強項にして仲々屈せず之を法廷に訴へて曰く、正業を営み正税を払ふ普魯西良民は妄に財産を毀損せらる可きに非ず。敢て国法の保護を仰ぐ、と。大王之を聴て大に喜び一賤民が宮廷に対する訟件も尚ほ法廷の厳正なる判決を得可しと信ぜらるゝは我国法官の信用厚きに由る。是れ実に国家の慶事なり。宜しく之を公表して一般の国民を安ず可しとて法官を称揚し水車營業を継続せしめたりと。此水車は即ち此美事の紀念なり。国民をして司法権の独立を疑はしむるは果して是れ誰の責ぞ。若し果して一腐敗漢の罪惡を掩護せんが為に司法権の独立を傷くるを敢てするの内閣あらんか。此の如きの内閣は憲政を乱るの大罪を犯したるの内閣なり。若し果して多数を恃んで此の如きの内閣をして此の如きの罪惡を犯すを余儀なくせしむるの政党あらんか。此の如きの政党は國家を腐壞するの偽党なり。天下の清議は世道人心の爲め此の如き者流を排斥せざるはあらざるなり。(十一月廿四日稿)

◎田中正造翁の禁酒煙。翁は從來磊落不羈起臥飲食極めて不規則にて、晩起して一日一、二食の事もあり、終夜睡らず筆を操ることあり。酒を使つて怒号することあり。唯其正を踏で恐れざる一片の氣は

終始変ぜざる好漢なるが、近年其健康衰へ精神過敏となりたるにぞ。友人、翁の飲酒を害ありとし「丈夫大事を負ひ乍ら口腹の慾に克たれざるとは何事ぞ」と言ひしに、翁は深く自ら奮へ、是より盃を手をせざるに至りて健康旧に復し、心身共に快活に加へ大に忍耐力を増加したり。昨年、未丁年者禁煙法案の提出せらるゝや、翁は井上角五郎氏等と共に其委員となりしが、井上氏病の爲に断然禁煙したる旨を告げて之を翁に勧めたることありしが、翁は六十年來の慣習容易に棄て難く、漸次に減せんと心懸居りしに、十二月二日前橋會堂に開かれたる青年俱樂部の演説會に臨み、社会の日に腐敗墮落するを慨き、之に就ても青年の奮起を要すとて克己の精神に論及し終りに臨み、翁は「私は先刻迄煙草を喫ひましたが宿室を出で此の神聖なる場所に入る時、自ら省みて禁煙を誓ひ六十年來の悪慣習を改めて青年諸君に対する手土産にする」云々と演べて、茲に全く禁煙せられたりと云ふ。

註

(1) 「加藤外務大臣」は明治三三年一〇月一九日から翌年六月二日まで在職した加藤高明。

(2) この号の「上毛教報」の前橋教會欄に「十二月二日 午後一時 青年俱樂部の發起にて田中代議士の演説あり、來聴者二百余名。同氏は有益なる経歴談を試みられ、終に此講談(演説)上より諸君に演説する以上は、今日限り契煙を廃すと述べられたり……」とある。

解

「加藤外務大臣」と「司法権の侵害」とは、ともに星亨の汚職事件をテーマの底流としている。政友会伊藤博文内閣(第四次)の外務大臣であった加藤高明が、日本の政治家が道德的にきわめて腐敗している点について慨嘆していることを紹介している。そしてこの星の汚点がさらに司法権にも及んでいることにも言及し、政友会という政党の根深い腐敗体質について「此の如き政党は國家を腐敗するの偽

党なり」とまで述べて舌鋒鋭く批判している。

星亨（一八五〇〜一九〇一）は江戸の町人の出身で、藩閥政治の批判者であったが、いわゆるやり手の積極財政推進派でもあったことなどから取賄の噂が絶えなかったようである。柏木はこのような人物が閣僚の一員とされている政治のありかた自体を厳しく批判している。

論壇

加藤文学博士の駁論を駁す

柏木義円

十数日以前、東京毎週新誌社は予に報じて曰く、十二月一日発行の太陽紙上に足下の駁論に對せる答論を掲ぐる旨加藤博士より通知ありたりと。予れ惟へらく是れ必定博士の得意なる進化論の学理に拠て予が根柢を衝かるゝ堂々たる駁論ならんと。何ぞ凶らん、今や博士の駁論を見れば徒らに不忠不義と罵りたる罵詈の言に過ぎざるを博士は屢々予を謂て「恐ろしい人物」と云はれたり。予は道は絶対無上にして国家よりも尊貴なるものなり、道に従ふの国家は必ず国運隆興せざるを得ず。斯道を發揮するは最も国家に忠良なる所以なりと主張するのみ。而して博士は反て道は国家以下のものなりと唱道せらるゝものなり。所見異なるか、宜しく冷静に其主張を陳じて是非を争ふ可きのみ、漫に忠不忠を呼ばるが如き寧ろ大早計と謂ふ可し。予は前論に於て僅かに「眼中無国家」の一言の為に大騒ぎを為したる所謂国家主義連の小量にして軽躁なるを慨し、若しトルストイ伯の如き人出でれば驚心駭愕如何ばかりならんか、是れ決して偉大なる国民の態度に非ずと論じたるが、碩学博士の如くにして予の如き者が道（宗教）の尊貴絶対なるを主張したりとて容易く「恐ろしき人物」など云ふは誠に意外なること、謂ふ可し。是れ果して博士の本心が抑も為にする所ある煽動的の言なるか、此の如きことを恐ろしなど云ふは決して大国民の氣象に非るなり。

予は是れより一々博士の所論を駁するに先ち一言して置く可きことあり。元來予の前論は博士が宗教国家大衝突なる極端なる場合、即ち国

家が大暴戻を為すの場合を想象して戦を挑まるゝが故に予は斯る際に為し得可き或る覚悟を憚らずして開陳せし迄なり。然るに国家を輕侮し国家を害するを意とせずと迄誣るに至ては実に怪しからぬ論法と謂ふ可し。

博士は予が思想の自由、良心の自由、信仰の自由が国家に尊重せられざる可らざるを説きしを駁して、個人の思想、良心又は信仰の自由の為に国家の主権が圧抑されたならば国家は一日片時も成立して居ることは出来ぬ、と曰はれたるが博士の所謂国家の主権が圧抑さるゝとは果して如何なる意味なるか。国家が此等の自由を制限を置く如く国家亦此等の自由に制限せられ居るに非ずや。是等の自由には決して国家が侵犯するを許さゝる所ありて国家自らが制限せらるゝ所あるを謂つて主権が圧抑せられたりと謂ふか。抑も是等の自由が国家が制限したる範圍を越へて放縱に走りしを謂ふか。予の思想の自由、良心の自由、信仰の自由を主張するは普通の意味を以て謂ふのみ。予は未だ文明社会に於て是等の自由が妄言と罵り去られたるを知らざるなり。

博士は駁者は臣民たる者が国家の主権に服従することを卑屈であると説て居ると曰はるれども予は不正不義となる暴戻なる国家に絶対的に唯々諾々盲従するを謂つて卑屈の国民なりと謂ひたれども単に臣民たる者が国家の主権に照従するは卑屈とは謂はざるなり。博士は駁者の如きは絶対的に宗教に服従し、而かも相対的に国家に服従するものにして殆ど国家を無視するものであると曰はるれども、予は絶対的に宗教（道）に服従するものなりと敢て憚らずして公言すると雖ども決して国家を無視するものに非ざるなり。道に由て国家の為に尽くし、道に由て国家の為に死し、国家をして有道の国家たらしめんとす。是れ眞の愛国なり。無我夢中に国家に盲従するもの、如き、是れ牛馬の所為のみ。予は予が良心に抛り、道に由て国家に事るを以て文明国家の臣民の義務と思惟するものなり。道に背き、良心に背て迄も国家に盲従するに非ざれば臣民たるの義務を全ふせしものに非ずと云ふか。然らば眼中利害の念ありて正邪の念なきものに非れば誰か国家忠良の臣

民とは没道義の徒の謂か。噫忠良の臣民を有するの国家は実に禍なるかな。国家を亡すものは所謂忠良なる臣民ならざるを得ざるなり。

博士は曰く、宗教を大とし、国家を小とし国家は宗教に服従せざる可らずと説く中古の羅馬法王権を今日に夢視せんとするもの、実に今日の時勢を知らぬ愚論であると。宗教は国家より大なり、とは、道は国家より大なり否な理想の国家は現実の国家より大なりとの謂なり。斯る思想中に何く中古の羅馬法王権を今日に夢視するの形跡あるか。是れ畢竟博士が宗教の歴史を知らず。現今の宗教思想を解せざるに由るなり。博士の如き名譽ある学者にして宗教を論ぜんには今少し宗教を知て後に論せらる可き筈に非ずや。博士は今を以て今日の時勢を知らぬ愚論と謂はるれども予が宗教は固より国家より大なりと曰ひしとして直ちに中古の羅馬法王権を夢視するものと臆断せらるゝ所を以て見れば、予は博士は未だ基督教に就て普通の思想たも解し居られずと断言するを憚らざるなり。

博士は予がトルストイ伯を推奨せしを尤め柏木氏も定めて伯に倣て「予は世界の市民なり、亦独逸なり、露国より来て日本を侵略するも予に於て痛痒相関せず、予は日本の強大ならんよりは寧ろ弱小を望む」と放言さるゝならんと曰はれたり。所謂愛国専売家が博大なる思想を有するものを不忠不義と誣みんには此の如き言を捕捉するは最も究竟の利器なる可し。併し苟も碩学博士の如く思慮あるものは決して斯る卑屈なる所為に与す可き筈に非るなり。若し国家が其強大を恃み、内は虐政以て人權を蹂躪し、人民を愚にし、外は侵略以て人の国を悩まし、暴戾至らざることなくんば愛国の余り其国家が強大にして罪を犯さんより弱小にして公義あり、平和あり、自由ある国たらんことを望むは寧ろ同情を表す可きに非ずや。且つ国家の弱小なるを望むは何故に不忠不義なるか。弱小にして平和と自由を楽しみ居る瑞西人民は恐くは侵略と圧制とに酔い居る露国の強大を羨まざる可し。瑞民は果して愛国心なき国民にして露民は愛国心ある国民なるか。予は我日本が不健全なる国家主義に誤られて正義公道を蔑如し、外は人類を

無みし、内は人權を凌圧し、心ある臣民をして日本の強大ならんよりは寧ろ弱小を望むと言はざるを得ざるの不幸なる日に遭遇するならんことを欲す。予は反て我日本が宗教と人道と平和と自由との擁護者として強大ならんことを望むや切なり。予や固より伯に敬服するものなりと雖ども其矯激なる議論に悉く同意するものに非るは公平に予の前論を読むものには明白なることなる可し。然るに博士が此片言を援引し来て予を不忠不義の奴輩と罵らるゝに至てハ実に心得ぬ次第と謂ふ可し。且つトルストイ伯を一文の価値なしと断じ、此の如き人物が澤山あらば露国は遂に滅亡すると謂はるゝ博士の見識に至ては吾人の片腹痛く思ふ所なり。

博士は予が學術対国家を論じたるを奇妙な論と笑ひ、帝種神出説が進化論を妨害したことは決して聞たことはない、国体維持の目的から天文学を妨害したことは少しも聞かぬ云々、と曰はるれども予は反て博士の此駁論こそ実に奇妙と思ふなれ。予は決して帝種神出説が進化論を妨害し、国体家が天文学を妨害したとは曰はざりしなり。博士が最後の一刀と称し態々割註に實際あることに非れどもと断はりて一個の仮説を設けて吾人に挑問せられたるが故に予、亦博士の顰に倣つて斯ることありしならば如何、と提問せし迄なり。而して暴戾なる国家には決して斯る例しなしとは断言することを得ざるなり。見よ、博士が目撃せられたる維新前の日本国家は果して學術を迫害することなしと保証し得る国家なりしが、更に見よ、文明の国家を以て許す維新以後の日本にも「神道は祭天の古俗」なる論文記者を迫害せし非文明なる事實さへありしに非ずや。學術界に於て絶対に尊貴なるものは唯真理なり、国家何物ぞ、帝王何物ぞ、露国のザールも英国の女皇も學術界に於ては何のアウトリチーにも非るなりとは是れ学者が学者としての意気に非るか。敢て問ふ、学者たる博士は之を以て不忠不義と為し學問をして国家の下に跪拜せしむるを甘するや如何。

博士は予が博士の留めの一刀に擬して反問したる一条に就き答へて曰く、軍隊上長官の命令は絶対的服従義務を生ずるもので毫末も善悪是

非の取捨を許すものでない、如何なる暴悪無道の命令でも上長官の命令は拒むことは出来ない。是れは政事上の権内杯とは全く違ふ云々、併し政事上の命令でも博士の所論に拠れば絶対的に服従す可き筈に非ずや。乱暴なる国家の主権者は宮女をして馬と交らしめ、胎女の胎を割きたるに非ずや。博士は唯亥々として馬と交る、是れ誠忠無二の国家の臣民なりとせらる、やと問ふことを知るも、特に軍隊の例を援引したるものは別けて絶対命令権ありと認めらるゝものに就きたるなり。固とより所謂是れ式の事を知らぬと云ふ訳には非ず。既に同じく博士の所論を批評したる予が上野民報第二百六十六号に掲げたる論文には「徴兵制度の下に兵役に就て居る者は軍隊としては己れの意志を殺して一種の器械となつて居るのであるから将官の命令の儘に発砲するのみである。進むも退くも唯器械的に働くのみである。其戦争の義不義に就ては全く責任がないのである」と論じ置けり。併し賈舗掠む可し、婦女輪姦す可し云々の軍隊的行動以外なる暴令に就て道念ある兵士は如何に為す可きやを博士に提問したるなり。而して博士は之に答へて士卒が死を決して上長官の命令を拒絶するが如きことは其志の嘉賞す可きにも拘らず全く国家に不忠なるものなりと曰はれたり。然らば更に問はざる可らず。不忠の罪惡を犯したるものを何故に嘉賞するやと、尚ほ問はざる可らず。博士は不忠にして嘉賞せらる可き行為を取るか、將た忠義にして厭棄せらる可き行為を取るかと、論じて此に至れば所謂忠義も余り貴きものに非るなり。国家忠良の臣民たらんには理性も無くし良心も殺さざる可らず。忠義の悪人、不忠の善人博士の国家主義も此に至て窮せるかな。今や忠義の悪人、滔々其人に乏しからず。剛健にして国家の骨となる可き人民は必ずや不忠の善人の中より起らざる可らず。将来の国家は益々宗教と調和して文明に進まざるを得ざるなり。此時に當て特更に暴戻極る野蛮的国家の不祥なる事例を想像し来て宗教と衝突せしむるが如き誠に無用の空論にして吾人の甚だ不快とする所なり。唯進化論に酔ふて理想を觀るの眼なく、徒らの倫理道德の説明迄も之を下等動物や野蛮人の性情にのみ求める

得意とする博士は亦好で暴戻無道なる国家の極端なる事例を仮想し来て吾人に挑まるゝが故に止むを得ず。亦極端なる事例を掲げて之に応ぜしに過ぎざるなり。吾人は亦重ねて此の如き所に論弁を費すを好まざるなり。

吾人も固とより国家の絶対権を認むるものなり。然れども之を認むるは政治的の意味に於て之を認むるなり。然るに博士は之を宗教的、精神的、倫理的の意味に於て主張せんと欲す。是れ吾人が敢て宗教（道）の權威を張て之に反抗する所以なり。ソクラテースは従順に国家の命令を重じて死刑の宣告に服従したり。是れ政治的に国家の絶対権に服従せしなり。然れども国家の命令と雖ども彼れの真理として国家を鼓吹せし所を取消すことは肯ぜざりしなる可し。国家は国家、宗教は宗教なり、全体国家の絶対権と云ふことを担ぎ来て敢て之を學術、倫理、宗教の權威に触れしめんと試むるが如き元來愚の骨頂なり。特に泰西的思想に通すると称せらるゝものにして之れあるに至ては実に怪訝の至に堪へざるなり。

終りに博士に向て問はざる可らざるものあり。博士は憲法第廿八条を掲げ来て予を謂て憲法に背くものとなして再三再四不忠不義の極と罵り此の如き不吉の者は一日片時も許し置く可き道理は豪もないと云ひ、是れでも我天皇陛下の臣民であらう乎と云ひ、実に乱暴極て明に憲法第二十八条に違反した不臣の極であると云つて頻りに法律的処分でも促さるゝが如き煽動的言辞を以て充たさるゝに至ては実に奇怪千萬と謂ざる可らず。博士は近來頻りに世界教の急処を衝く、倫理學の急処を衝くなど稱して挑戦せらるゝは固とより一方には宗教上、倫理上に絶対無上なるものあるを認識し居る學者、宗教家あるを認め之に向て博士の所論を示し、正々堂々言論場裡に學理に拠て雌雄を決せらるべき筈に非ずや。然るに日本憲法を楯に取り政治的權威を後援として吾人反対論者に臨まるゝが如き、実に卑怯至極卑劣千万と謂ざるを得ざるなり。若し果して憲法擁護の為に予の罪を問はんとならば、宜しく之を明白に法律問題、政治問題として來らるべし。予の駁論に答

るに实际的国家的権力を借らんとするが如き尋常一様なる頑冥なる保守家の所為ならばまだしもの事名譽ある碩学加藤博士の動作としては予は決して之を容赦すること能はざるなり。宗教倫理の権威問題を争決するに当り、動もすれば国家の権威を以て之に臨み、敢て口を箝して国家以外の権威を憚らず論道するを得ざらしむるが如き、是れ学問の消長に関するの大事に非ずや。縦へ俗論が斯る妄動を為さんとするも博士の如きは学者として率先之を排斥し、以て思想言論の自由を擁護せらるべき筈に非ずや。然るに今や反て博士自ら之を為すには何ぞや。是に至て予は儼然として学者としての博士の責任を問はざるを得ざるなり。博士、請ふ之に就て明答を吝しむ勿れ。

右は去る十二月十四日の東京毎週新誌に掲げしものなり。之に対して博士に左の如く同新誌社に申し越されたり。

貴誌の柏木氏の反駁説に対し、小生論すべき筈の処、議會開会中多忙、並びに寒中は老書生甚だ困難に付、三、四ヶ月後の太陽紙上に論すべき考に候云々^註

註

(1) 一八九二(明治二五)年のいわゆる熊本英学校不敬事件。この事件は教員奥村禎次郎の「眼中無国家」つまり、我が校の教育理念は、一国家に限るといつた狹量なものではなく、コスモポリタンである、という演説内容が引き金となった。柏木自身も当時この学校に教師として在職しており、奥村の鹹首回避のために奔走した一人であった。

(2) 加藤弘之に対して「碩学博士」と呼んでいるのは、柏木のぎりの皮肉の表現と思われる。

(3) 柏木は加藤が「国家を軽侮し国家を害するを意とせずと迄誣る」点を批判する。すなわち、柏木は「文明社会」においていはば国家性善説に立っているとみてよい。加藤はしかるに、極端な例であるとはいえず、国家が暴走して他国に戦争を仕掛ける場合

云々という。柏木においては正しき国家はけつしてそのようなこととはしない、のである。柏木は「道に由て国家の為に尽くし、道に由て国家の為に死し、国家をして有道の国家たらしめんとす。是れ真の愛国なり」とまで述べ、自身がけつして反国家主義ではないことを力説する。この「道」とは真の宗教、すなわちキリスト教である。

(4) このあたりの論法は、国家と憲法との関係を示す、いわゆる立憲主義の考えかたに似ているように思われる。

(5) 柏木の国家観は明瞭である。曰く、臣民が「国家に盲従する」のではなく、「予が良心に抛り、道に由て国家に事るを以て文明国家の臣民の義務と思惟する」と。

(6) この指摘は、帝国大学教授であった久米邦武が「神道八祭天ノ古俗」を一八九二年に在野の史家田口卯吉が主宰する『史海』に掲載したことに発し、帝国大学教授の辞職を余儀なくさせられた事件をさす。久米はいわゆる神道が、古代社会に普遍的に存在していた祭儀であることを述べたのだが、それが不敬とされた。

(7) 第五代武烈天皇(かの仁徳天皇から五代目の天皇)の所行をさすか(『日本書紀』武烈紀。ただし『古事記』にはこの記述がない)。

(8) 未見。群馬県立文書館にも所蔵されていない。

(9) 加藤はこの時期、雑誌『太陽』誌上に「貧叟百話」と題した、かなり気楽なエッセイを連載しており、のちにそれらを集成して『天則百話』(一八九九、博文館)として出版している。しかし、当該する記事は見られない。

(10) 「東京毎週新誌」第九〇三号(一九〇〇年一月一四日)の柏木「加藤文学博士の駁論を駁す」。

解

この文章は柏木の教育観、国家観を余すところなく表しているもの

である。具体的には、国家と宗教との関係、如何である。柏木はキリスト教信仰に基づいた国家観を提示し、加藤はいわゆる国体観を示している。柏木の国家観について興味深い観点がある。それは、柏木が「政治的の」側面における「国家の絶対権」を認める、という点である。「絶対権」の具体的様相は詳細ではないが、加藤がこれに関して「宗教的、精神的、倫理的」側面からの国家の絶対権を認めるのに対し、柏木の場合は「政治的」に限っているのである。加藤の見解に「宗教的」が含まれているのはもとよりキリスト教を排斥する意図に基づいているためであった。「宗教倫理の権威問題」に対して「国家」が介入することを非とし「俗論」に学者・加藤も加担していることを非難するものである。